

人類の幸福に自然は欠くことはできません。私たちは無意識のうちに他の生物とのつながりを求めるものです。自然と関わることで、心が癒やされたり、新たな着想を得たりするなどの恩恵を受けています。

オフィスや喫茶店などで、観葉植物を目にする機会は多くあります。自宅で育てている人もいるでしょう。

一般的に使われている観葉植物という言葉ですが、この呼称は一九五二年にイギリスの種苗園主トマス・ロックフォードが考案したという説があります。それまでは「緑葉植物」あるいは「葉植物」と呼ばれていたそうです。

この「観葉植物」を、「葉の色彩や形を鑑賞するために栽培される植物」と定義すると、日本の盆栽もその一つでしょう。

盆栽はかつて、鉢に植えた木をさす「鉢木」や、自然石に木を根付かせる「盆山」などの名で親しまれていました。平安時代の初期には、植物を鉢植えにする文化があったようで、八三九年、農民が橘の木を鉢に植えた「鉢木」を、仁明天皇に献上した記録が残っています。

この「鉢木」は、室町時代に確立された、能楽の始祖・世阿弥によるとされる能曲の題材に用いられています。

物語は、貧しい一人の武士が、寒さこたえる冬の日に旅の僧侶を家に泊めますが、薪が足りず、やむを得ず自らが大切に育ててきたウメ、サクラ、マツの鉢木を薪にして暖をとるところから始まります。実はこ



植物を愛でる文化から 自然を大切にすることを

の僧侶は時の将軍北条時頼で、この武士が幕府の招集で馳せ参じた際に、時頼はウメ、サクラ、マツにちなんだ名の所領を与え、一宿の恩に報いました。

この話から、愛情を込めて育てた鉢木が、持ち主にとつてかけがえのない宝物であったと捉えることができます。また、貧しいなかでも、この話のように、よほどのことでなければ手放すことがなかった様子から、鉢木は武士の心のよりどころとなっていたのかもしれない。

その後、江戸時代になると、鉢木は蛸の足のように幹や枝を曲げる「蛸作り」という作り方が主流になりました。これは高度な技術を要し、人工的に枝を曲げた造形をもつて美しいとされていたようです。しかし、明治時代に入るとその風潮から翻って、自然の美を尊重する姿勢に変化していきました。高度な技術が不要になると、万人が手に取れるものとなり、一般に広く普及しました。この頃から「盆栽」と呼ばれることが多くなったようです。

現在、世界中に愛好家を持つ盆栽は、茶の湯や生け花を凌ぎ、最も有名な日本文化とされる面もあります。

歴史の中で、美の様式や楽しみ方が変化してきた盆栽ですが、美しい自然を愛でる精神は今も昔も、変わらずに私たち日本人の心に受け継がれています。

普段何気なく目にする自然を愛で、愛着を深めるとともに、自然を大切にすることを養いたいものです。